

バーガー脱物象化論と媒介構造論の結合と再解釈

Combining P.L.Berger's "De-Reification" and "Mediating Structure" Theory and its Reinterpretation.

松 元 一 明

Kazuaki Matsumoto

P・L・バーガーは「物象化と意識の社会学的批判」(Berger and Pullberg 1965)において、人々の利便性のために創られた制度や社会的役割などが、人々を抑圧する結果を生み出す「物象化」と、物象化を招く人々の認識構造を明示するとともに、物象化の結果、人々が陥る疎外状況から人々を解放する「脱物象化」の契機を理論的に提起した。

後の『故郷喪失者たち』(Berger et al. 1973)と『犠牲のピラミッド』(Berger 1974)ではともに、1970年前後に西欧諸国を中心に台頭した「運動(The Movement)」を取り上げ、それらは近代(Modern)と近代性(Modernity)への対抗意識である「脱近代的衝動」と「反近代的イデオロギー」により構成されたものであると分析している。両著においてバーガーは、「運動」をイデオロギーに「利用」された青年の「騒乱」であり、近代制度への寄生によって成り立ったと痛烈に批判するとともに、「運動」が提起した問題意識を調停するための「故郷(心の拠り所)」の創出を提示した。

本論ではまず、「物象化と意識の社会学的批判」の理論枠組を用いて、後続するバーガーの著書を再解釈し、「運動」が社会的世界の物象化と、その結果生じた近代の諸問題に対する脱物象化の契機となったことを導き出す。

そして青年層やマイノリティは、社会的世界の物象化や疎外状況から直接影響を受ける存在であり、人々の虚偽意識に敏感に反応するとともに、社会において周縁化された問題を解決するため「運動」を担ったと評価する。合わせて、後続する諸運動や運動体の原型を「運動」にみだし再設定するとともに、継続的な脱物象化の可能性と条件について、バーガーの「媒介構造(中間組織)」論を用いて提示する。

[キーワード：脱物象化、媒介構造/中間組織、近代、「運動」、ライフ・ポリティクス]

本論はまず、P・L・バーガーの『故郷喪失者たち(以下、『故郷』)』と『犠牲のピラミッド(以下、『犠牲』)』を、スタンリー・プルバーグとの共同論文「物象化と意識の社会学的批判(以下、「物象化論」)」における「脱物象化」理論の事例研究と位置づける。

そしてバーガーが“The Movement”と呼び、事例とした1970年前後に世界各地で台頭した諸運動(以下、

「運動」)などの集合行為を、「脱物象化」の契機であると解釈し、現在につづく市民活動、NPO/NGO活動を「脱物象化」の実践として捉える。

バーガーが対象としながらも批判した「運動」は、社会的世界の物象化に対する「脱物象化」の契機となったと評価するとともに、「脱物象化」が有効となる方法と実践について、バーガーの「媒介構造(中間組織)」論を用いて検討、提示することを目的とする。

1 バーガー物象化論と概念について

ここではまず、バーガーの「物象化 (reification)」という概念について整理をする。ついで人々の間で共有され独自の意味体系を持つ世界である「社会的世界 (social world)」の物象化とその結果による「疎外 (alienation)」、そしてその状態から脱するための「脱物象化 (de-reification)」を理論的に整理したい。

1.1 物象化と疎外

バーガーは「物象化論」において、「物象化」という認識について社会的に取り上げ、物象化により生ずる問題とその解決方法について考察している。「物象化論」は、後のバーガーの代表的著作『現実の社会的構成』(以下、『構成』)での概念設定や、理論の核となる論文である。

物象化とは、本来は人々の共通認識や了解事項であるはずの制度や社会的役割に、「存在論的な地位を与える」(Berger and Pullberg 1965: 206 = 1974: 109) ような、人々の認識のことを指す。

物象化はまず、思考の簡素化や選択範囲の最小化といった、人々の思考の省力化や合理化からスタートする。それに伴い人々の行動が習慣化すると、自明視された世界 (= 当たり前、常識) の固定化がなされ、人々の行為が単なる過程に転化された結果、「行為者なき行為を規定したり、創造者なき実践を規定」し、「主体たる人々の人間性を奪う」(Berger and Pullberg 1965: 208 = 1974: 111-2) 事態を生じさせるというプロセスをたどる。

物象化の最大の問題についてバーガーは、制度や役割などで構成される「社会的世界」によって、その創造主である人間自身が威圧されることにあつた。もともと制度や役割などは人々の意味ある行為により創り上げられたものであり、同時に人々の了解のもと、客観的な構成物として相互認識され機能するものである。

バーガーは、社会が無秩序状態 (アノミー) に陥るのを避けるため、社会的世界は「ノモス (nomos)」という形態をとると説明する (Berger 1967: 22 = 1979: 32-3)。ノモスとは一種の秩序の体系であるが、つまり社会が「意味ある秩序」として存立することで、人々の行為に意味を与え、また行為の省力化や自動化に寄与し、アノミーへの盾として機能するという。

あわせて行為に意味を持たせるさまざまな「行為類型 (particular type of action)」が生まれ、それに沿って人々が役割を果たし、制度が確立され、その結果、制度の複合体である「社会構造」が成立する。

人々が本能的にアノミーを恐れ、秩序だった世界を欲することが結果的に「疎外された意識」を生じさせるとバーガーは指摘した (Berger and Pullberg 1965: 200 = 1974: 102)。例えば、人びとによる世界の宗教的な解釈も、そのメカニズムに該当する。社会的世界に対する人々の解釈のあり方が結果的に物象化を生み、人々と世界とを分断する契機となる。

一方の疎外とは、「創造活動と創造物との統一性」をうち破り、「創造者を威圧する」(Berger and Pullberg 1965: 200 = 1974: 101) 過程および事実のことを指す。つまり人々の行為により構成されたはずの社会的世界が、逆に人々を威圧、抑圧するような「状況・状態・結果」が疎外である。

物象化は、疎外の契機となる人々の特殊な認識の仕方であるといえる。それは人々が自明化 (視) された世界を疑いなく受け入れ、意識の中で固定化するような認識のことである。このような人々の認識を、バーガーは「虚偽意識 (false consciousness)」と呼んでいる (Berger and Pullberg 1965: 205 = 1974: 107)。

1.2 脱物象化

バーガーは以上の考察を踏まえ、物象化やその結果となる疎外からの人々の「解放」条件と、物象化が生み出す問題群への対応可能性を「物象化論」の結論として示している。

以下は物象化と、それにより生み出される疎外を解決する契機となる「脱物象化」が理論的に起こりうる条件である。「脱物象化」の契機を経ることにより、人々は「虚偽意識」から逃れられ、本来の「正常」な認識を取り戻すことができるとした。

脱物象化が起こりうる条件

- (1) 「自明視されていた世界の崩壊を必然的に伴う社会構造の全面的崩壊」がおきる場合
- (2) 「文化的接触という状況やその結果として起こる<文化的衝撃>」によるもの
- (3) 「社会的にマージナルなところにいる個人や集団が持つ傾向」により生起される場合

「物象化論」は理論的な論文であり、示された結論は抽象的で、その具体的方法や対応策までは言及していない。バーガーも、「それ以上の研究については問題を経験的な知識社会学に残しておくしかない」(Berger and Pullberg 1965: 209 = 1974: 112) と述べていることから、後に脱物象化への具体的(実践的)な研究を企図していたことが伺える。

その一年後に上梓され、「知識社会学論考」と副題がつけられた『構成』では、「主観的現実 (Society as subjective reality)」と「客観的現実 (Society as objective reality)」との関係を「弁証法」により説明している。『構成』は「物象化論」のアイデアを精緻化し、理論的に完成させた著書として位置づけることができるものの、脱物象化の具体的事例に関する言及はなく、先の「物象化論」からの理論的進展はない。

また次に続く宗教の社会的構成論として位置づけられている『聖なる天蓋』(以下、『天蓋』と略す)では、宗教的行為を肯定したうえで、(物象化された)客観的現実がどのように維持されていくか、またどのように正当化されるのかということに論が移っている。

2 『故郷』、『犠牲』における近代と脱近代の分析

ここでは『故郷』と『犠牲』において主題化された、近代の実態と脱近代・反近代の意識について考察するとともに、近代における諸問題に呼応して発生した1970年前後の「運動(“The Movement”）」(Berger and Neuhaus 1970: 31)の分析をすすめる。そして「運動」の源泉となった「脱近代的衝動」に対するバーガーの解決法を示す。

2.1 バーガーによる近代の分析

『故郷』は、「物象化論」や『構成』で確立された理論を、現実問題に適応した著作として位置づけることができる。バーガー自身も『故郷』の序章で、「知識社会学」を理論的準拠ととし、近代と近代意識に起因する「反近代化」・「脱近代化」の動向にアプローチすると述べている。また翌年出版された『犠牲』では政策研究の意向が強く出され、ラテンアメリカなど第三世界における、「反米」・「反近代化」の意識と構造を実証的に分析した著作となっている。

『故郷』と『犠牲』で共通して取り扱われた事象は、1960年代末より70年代初頭にかけて、アメリカを中心

とした西欧社会と、第三世界でおこった政治・運動的諸動向である。これら諸動向は、円熟した近代とそれを支える諸要素と、近代化に対抗する意識によって引き起こされているとした。とくに先進諸国における反体制運動や、青年運動などの根底にあるものを「脱近代化の衝動 (the de-modernizing impulse)」とし、第三世界に存在する、先進国や西欧的イデオロギーへの対抗的意識については「反近代的イデオロギー」(Berger et al. 1973: 175、Berger 1974: 226)と定義づけた。

それでは両著書で焦点となった「近代 (Modern)」とはどのようなものなのか。『故郷』の中でバーガーは、近代の主な特性を「工業/技術生産 (technological production) における諸制度と諸過程」と「主要諸制度の官僚制化」(Berger et al. 1973: 182-3 = 1977: 212)ならびに、それらによりもたらされる「生活世界の複数化 (pluralization of life-world)」であるとしている¹⁾。

これら近代の特性は、さまざまな媒体を通じて世界の隅々や個人的な意識、アイデンティティにまで入り込む。「近代化 (Modernization)」とは、そのような近代の「パッケージ」²⁾が「担い手」³⁾をとめない、覇権的に伝播していくプロセスのことをいう。

『故郷』では、先進諸国における青年文化や対抗文化により担われた一連の反体制運動を、「脱近代的衝動」に基づいた「脱近代化運動 (demodernizing movements)」であるとして、詳細に分析されている。また『犠牲』では、近代化の途上にある第三世界の人々の意識に焦点をあてており、そこで醸成される「反近代的イデオロギー」や東西陣営の対立の構図を明らかにしている。そして、アメリカによる政治的介入によって、第三世界での革命や暴動、諸運動が引き起こされていると分析している。

2.2 脱近代・反近代としての「運動」

次に近代、近代化に起因した一連の諸動向の担い手と、その原動力となった要因をみていきたい。バーガーは『故郷』に先駆けて、その分析の素描となる論文“Movement and Revolution”(Berger and Neuhaus 1970)をノイハウスとともに執筆している⁴⁾。この中で当時の「運動」の「構成体」と「イシュー(議題に挙げる問題)」を分析し提示をした。

まず「運動」は、①「青年文化」、②「青年運動」、

そしてニューレフトや過激派学生などの③「急進的運動」⁵⁾と三つの構成体に分けられる (Berger and Neuhaus 1970:32-3)。

「青年文化」は、先進国に共通にみられる基本的な社会構造の一つであり、「運動」に限らず、関連した現象も含んだ幅広い概念である。若者によって支持されるファッションや音楽、アートやライフスタイルなどもこれに該当する。

「青年運動」は、青年文化やその中で問題にされた 이슈をめぐるアドホックな運動であり、担い手は学生を中心とした「青年層」である。青年運動は、性の解放やマリファナ合法化運動なども含む対抗文化や、ベトナム反戦などの平和運動までさまざまなものを 이슈としていた。このような運動は自然発生的に表出し、目標が達成されると収束するものであるとしている。

一方「急進的運動」は、政治的な体制変革を主目的とし、時に意図的に青年層に接近するものである。アイデンティティ、ヒューマニズムやモラルにかんする、いわゆる「ライフ・ポリティクス」⁶⁾にかかわる 이슈を取り上げることで、青年層などの賛同を得て広がるとした。

バーガーは、当時アメリカで主題化された 이슈のうち、平和や第三世界を争点とした「ベトナム戦争」、マイノリティの権利に関連する「ブラックアメリカ」、制度や管理が争点となった「大学」をとり上げ、当時展開された「運動」とのかかわりを論じている。そしてそれら 이슈は、「政治体制と個人的生活、または歴史と個人史」が交差する試金石であるとし (Berger and Neuhaus 1970:64-5)、そのような 이슈は政治思想的に利用されるべきものではなく、「急進的運動」による政治思想的利用を批判する。

バーガーは以上の分析を通じ、当時の主たる「運動」は、アイデンティティ、ヒューマニズムやモラルといった 이슈をきっかけに展開した、「青年層」による「近代官僚制」への異議申し立てであると結論づけている。つまり、「近代官僚制の構成要素が、〈運動〉を生んだもっとも重要な要因」 (Berger and Neuhaus 1970:36) であり、それは当時の「青年層」の特異な性質とも関連していることを示した。

「運動」の主要な担い手となった青年層は、個人的人格の意味を強調された「近代的幼少期」を経て、長期的にわたる教育期間や、拡張された青年期 (モラト

リアム)⁷⁾を過ごしている。このような特性ゆえに、ヒューマニズムやモラルにかんする「イシュー」を契機に、近代の構造と自らの理想のあいだにギャップや矛盾を見出す。また形式ばった近代の官僚的方法が、人々への「疎外 (alienated)」、「搾取 (exploited)」の表象と感じるようになる (Berger and Neuhaus 1970:37)。そしてその衝動の矛先は、合理性を旨とする「非人間的な」官僚主義へと向かったと捉えた。

“Movement and Revolution”の結論に加え、『故郷』においても、青年層を中心とした「運動」が他の諸動向といかに融合し、「脱近代化運動」という形式をもったのかが分析されている。“Movement and Revolution”でも述べられているように、対抗文化や反体制運動はまず青年文化に寄生する (Berger et al. 1973:202 = 1977:234)。社会化過程にある青年層は「社会をつくりだしてきたという意識から無縁」なため、社会から疎遠な存在であるという自己意識が先行している。そのため既存の体制や制度に、疑義を質しやすい状況にある。そして自らの理想を反映させるため、社会的世界との「交渉」を必要とし、結果、反体制運動などの主要な担い手となるのである。

このような背景をもとに萌芽した「運動」は、社会においてマージナルな存在であった社会的弱者を含むマイノリティや女性の解放運動、第三世界の反近代的な動きと連動する。さらには、脱近代的衝動と親和性のある自然保護運動や東洋思想、カルト、オカルト的な文化とも結びついたらとバーガーは述べる (Berger et al. 1973:205 = 1977:238)。

結果的に「運動」の行き詰まりを見て、バーガーは対抗文化や青年文化を「反制度主義の制度化」 (Berger et al. 1973:213 = 1977:247) と皮肉り、脱近代化の一連の動きは、近代の制度に寄生することでしか成立しえなかったと結論づけている。

また『犠牲』では、西欧主導の近代化の帰結として、第三世界における「反近代的」・「反西欧的」運動やイデオロギーが成立したとしている。そして第三世界の反アメリカ・反西欧運動は、対立構造や問題意識を共にする対抗文化・反体制運動と親和性をもったと分析した。また、近代性の中核をなすアメリカの政策、とくにベトナム侵攻など第三世界への政治的介入を批判するとともに、対抗文化や青年文化、左翼リベラルによる第三世界の「利用」も非難した。そしてその「利用」に同調した、第三世界の反近代的なムーブメ

ントの限界も述べた。

2.3 バーガーによる解決策

近代の特性である「工業/技術生産」領域は、合理性に起因する抑圧・制限・葛藤を生み出し、また近代の特徴のひとつである「匿名性」は、社会関係を複雑にする原因となる。そして「官僚制」は関係性と諸制度の形式化を生み、そのありかである統治領域へと不満が集中する (Berger et al. 1973: 181-3)。このように「運動」が問題にしたイシューはすべて、近代の要素から起因するものであったといえる。

しかし先述した通りバーガーは、脱近代的衝動や反近代的イデオロギーにもとづいた「運動」の限界を述べる。そして「運動」は、超制度的自己による制度攻撃という様相を呈し、「虚偽的制度」対「真実の己」という構図を伴って「私事化」へと向かうか、「全体主義」を志向するなど、「運動」の目的の大前提を覆すディレンマに陥ると予測した (Berger et al. 1973: 248)。

青年文化とは、人々や関係性の合一化と素朴化といった志向に根ざしたものであり、青年はゲマインシャフト的な趣向をもつとバーガーはいう (Berger et al. 1973: 208 = 1977: 242)。ゆえに近代の特性である多元性、合理性、多相関性や匿名性と対立する。そして個の準拠点や、行為の基準を消失させてしまう近代＝「生活世界の複数化」に抵抗する。

バーガーは、青年層を中心とした「運動」の台頭は、近代人特有の「安住の地の喪失 (homelessness)」の根深さを示したものであるとし、それら諸問題とディレンマを調停する「中間的解決策 (intermediate solution)」を提示する。私的領域の保守と再構成こそが、既存の客観的現実からの「侵食」に対する有効な解決策であり、脱近代的衝動の底流にある「故郷にいるような安住感 (being at home)」を得るための方法であるとす。そして制度化の弊害を指摘しながらも、私的領域の組織化として「第二次的制度 (secondary institutions)」なる「中間集団」の有効性を述べた (Berger et al. 1973: 187 = 1977: 217-8)。

結論として、近代における公的領域と私的領域の二分化をある程度容認しながら、個人が自由と帰属意識のバランスをとる必要を説く。同様に『犠牲』においても、近代国家の抱えるディレンマを解決する役割を果たす、「(個人と国家秩序の) 中間的な構造 (intermediate structures)」の探求と確立の必要性を示唆し

ている (Berger 1974: 236 = 1976: 302)。

バーガーは、既存の社会の構造変更の必要性を述べながらも、脱近代化の検討と提言は「術学的ユートピアニズム」 (Berger et al. 1973: 235 = 1977: 276) にすぎないと自虐的に述べている⁸⁾。着目した一連の「運動」は、バーガーには「故郷喪失者たち」の無秩序な祭りと映り、その展開に失望したと考えることもできるだろう。

その後バーガーはノイハウスと共に、“To Empower People” (Berger and Neuhaus [1977] 1996) において、「媒介構造/中間組織 (mediating structure)」の具体的な姿を検討した。

ここで述べられる「媒介構造/中間組織」とは、個人の私的領域と、巨大な制度である公的領域のあいだに位置するものである (Berger and Neuhaus 1977: 158)。それらは「疎外や近代生活のアノミー化から個人を保護する一方、人々の生活に占める価値により、巨大な制度を正当化する (Berger and Neuhaus 1977: 148-9)」ことに合わせて、「社会における価値創造とその維持を呈示する (Berger and Neuhaus 1977: 163)」役割をもつものである。

具体的には、コミュニティ、家族、教会、慈善団体などが該当するという。バーガーはこのように、制度化された公的領域からの要請や、近代化過程で派生した多元的現実の中で、いかに人々がアイデンティティを保てるかということに論をすすめていく。その上で「中間組織」は、私的領域を保護する「故郷 (home)」になりうると結論づけた。

バーガーの「解決策」は、近代の「多相関的現実」 (Berger et al. 1973: 186 = 1977: 216) から、私的領域を堅固に守り防御するという方法である。近代性の特徴である「生活世界の複数化」という状況のもと、人々は自ら創造した「故郷」で「存在論的安心」⁹⁾を得ることができるかもしれない。しかし近代や、近代性の生み出す諸問題や解決すべきイシューにたいし、人々がどうかかわり、行為していくべきかという問いには答えていない。

3 近代の分析：制度化と物象化

バーガーが着目した「運動」は、近代という巨大な制度の是非を問うたものといえる。以降、バーガーが

示した結論を止揚し、1960年代末に萌芽した「運動」を「脱物象化」の契機と位置づけ再検討するが、その前に社会的世界と近代のそれぞれの構成を明らかにし、近代の社会的世界が持つ物象化傾向を示したい。

3.1 社会的世界の物象化傾向

社会的世界とは、人々のなかで共有されている客観的現実であるが、その構造がどのようなものなのか、バーガーは「物象化論」と『構成』のなかで検討し定式化している。

その前提は、人々の行為の結果として成り立つ全体が社会的世界であり、全体性が行為に意味を与えているという相関関係である。世界の創造は一個人の行為の結果でなく、人々が共に参与するものである。社会的世界はあらゆる人々の行為で成立し、そして人々により常に確認されつづけることで構成される。また継続的な行為から成り立つため、決して完成されるものではない。

社会的世界の構造はいくつかの意味領域にわけられており、それぞれの領域が特定の行為類型の場を形成している (Berger and Pullberg 1965 = 1975: 103)。構造は、言語を基本とした家族・経済・国家などの諸制度の複合であり、人々は諸制度を通じ、社会的存在としての自己自身をつくりだしている。

社会的世界全体を維持するためには、制度の「正当化 (legitimation)」や、制度的世界を次世代へ伝達する社会化担当者などの「役割」を与えられた人々を必要とする。

『構成』においては、制度の「正当化」や、制度を支える要素としての「役割」について具体的に言及されている。制度の「正当化」は、とくに次世代に伝達する「社会化 (socialization)」過程で必要とされ、ある制度を「正当化」するために、他の制度を利用するなど、社会的世界は全体性と秩序を維持しようとする。

制度における「役割」は、制度からの正当化により存在的地位を与えられ、制度が役割をつくり、さらに役割に忠実な行為が制度を強固なものにしていく。制度と役割はこのような相補的な関係にある。また役割により新たな制度がつけられることもあり、制度と役割は弁証法的関係にある。

一方、制度の成立過程である「制度化 (institutionalization)」は、人々が行為をおこなう上で「無意識な自動性」 (Berger and Pullberg 1965: 203 = 1974: 105) を

持つ必要から行われる。人間は行為する存在であり、有意味に行為するためには制度をつくり、制度に則して行為する必要性が生じる。行為に意味を求めることは人間の本能であり、制度をつくることも人間の本能の結果である。しかしこれらのことが、疎外への過程そのものであるとバーガーは述べる。

「人間の行為の事実としての制度化と、それによって生み出された制度的世界—つまり社会構造—とは、人間の行為が行為者から疎外される一つの運動とみなすことができるからである。換言すれば、疎外と社会形成とは事実として結びついた過程である」 (Berger and Pullberg 1965: 203)。

バーガーによれば、社会的世界をはじめとした現実の世界は、主体である人々の「内在化 (internalization)」・「外化 (externalization)」・「客体化 (objectivation)」の各契機を経ることにより発展的に成立する (Berger 1966)。社会的世界は、このうちの「客体化」の契機において成立する。

「制度化」は、客体化の下位概念として位置づけられ、客観的現実の主要な構成過程である。客体化は、人々の行為である外化の反復とそれに対する人々の認識により現実が成立する段階であるが、とくに制度化は、行為の習慣化やルーティン化と深くかかわりがある。

では客体化のひとつである制度化と、物象化 (およびそれに起因する疎外) との相違はどこにあるのか。

バーガーは、客体化や制度化は人間のア・プリオリな行為の過程であるが、物象化はあくまで経験的なものであり、意識のア・ポステリオリな結果により生ずるものであると述べている。つまり客観的現実である社会的世界や制度は、人々の内在化のしかた次第で物象化されてしまい、疎外をうみだす危険性を内に含んでいるということである。

制度化は制度が成立するプロセスであるが、物象化は制度に対する意識の変質と、その結果により疎外を生むプロセスである。これが客体化の構成要素である制度化と、物象化の理論的な相違である。

では社会的世界を物象化させてしまう意識とはどのようなものなのか。制度化により客体化された制度や役割は、人々の間で交わされる相互的作用のなかで再帰的に意識され、確認されつづけることで社会的に成

立し機能する。このため社会が人のために機能するのも、また物象化してしまうのも人々の「意識」の問題ということになる。

バーガーは、物象化があらわれる意識を説明するため、まず意識のレベルを、前反省的 (pre-reflective) 反省的 (reflective) ・ 理論的 (theoretical) レベルの3つにわけ、そして反省的および理論的レベルにおいて物象化の意識があらわれるとした。

これに従えば、自己や他者の行為をふりかえり意識するとき、またその行為がどのような類型に属するかを定式化するときが、物象化へと進むかどうかの転換点となる。つまり自己の意識を固定化させ、類型化し、経験則のみで自己や他者を判断することをはじめ、制度や役割を存在よりも先行したものと「錯認」することが、社会を物象化させ疎外を生みだすもととなる。

3.2 近代の諸問題

社会的世界は、行為するときいちいち考えなくて済むといったように、行為のルーティンワーク化で人々に寄与するが、それはまた類型化や定式化により意識の固定化を生じさせる危険を合わせもつ。社会的世界の物象化は制度はもとより、制度によりその存在を正当化された他の制度、組織や役割などにもおこりやすい。

以上で整理したように、社会的世界はもともと物象化する可能性をもつものである。そして近代性は、物象化を促進するさまざまな要素を含むものである。以下、近代の特性とその物象化傾向についてあらためて整理したい。

近代社会の特性は「工業生産」と「官僚制」、そしてそれに伴う「生活世界の複数化」であることはすでに述べた通りである。近代性の「パッケージ」である工業生産領域や官僚制は、経済合理性および目的合理性を追求するために、他者や自己自身を典型的、匿名的にする理論的定式化を必要とする。

さらに近代の社会的世界は「アノミーへの防御」と、自ら創りあげた諸制度の正当性が必要であるために、それを維持する正当化担当者と、次世代へと伝達する社会化担当者が「統治領域」に必須となる。経済活動領域である工業分野も、政治的・統治領域を占める官僚制のいずれも、その維持と発展のために制度の正当化・社会化担当者を必要とする。

制度の正当化・社会化担当者といった社会や制度を生み出す側には、社会的世界の可変性が制度的に担保されているため、自らがつくりだした世界により疎外されることも少ない。

その一方、社会的制度の生成と維持に直接かかわることのない一般の人々は、「近代社会のすべての主要な公共的諸制度は(中略)、個人のいきいきとした体験の中で具体化するような意味をほとんどもたない、形式的で迂遠な存在と感じられる」(Berger et al. 1973: 183-4 = 1977: 213) ようになる。それが「近代社会の機能的合理性(「非人間化」)と多元性(「世界」)に対する深い不満」(Berger 1974: 195 = 1976: 253) へとつながり、不満は制度を定立、維持する「統治領域」へと向かう。

とくに、社会的世界の後継者・後続者や、社会化過程にある青年層は所属する社会的世界について、自らも関与する「自己の作 (opus proprim)」という意識よりも、先行者などの「他者の作 (opus alienum)」として映る (Berger 1967: 86 = 1979: 133)。

このように社会的制度を維持する中心的な存在よりも、周縁に配置されている人々や、あらたに社会的世界に参画する青年層、また後継世代に社会の物象化傾向への意識があらわれやすく、それらの人々が結果的に疎外された状況へと置かれやすい。それが社会的世界に対する「異議申し立て」へとつながるのである。また、外国人やマイノリティなど、その社会的世界における正当性が共有されない立場の人々や、制度や文化などを共有しない人々なども同様である。

しかしこれらの人々やその置かれている状況は、社会の人々の意識が類型化や定式化に捕らわれている事実を気づかせ、物象化した社会的世界を転換する契機＝脱物象化の契機ともなる。その実践が「運動」である。

4 脱物象化契機と実在

ここではこれまでの分析に基づき、「運動」を脱物象化理論における脱物象化の契機であると位置づけ、バーガーの理論を再解釈する。そして現実には行き詰まった「運動」の問題点を考察し、脱物象化の有効な方法とその実在である「媒介構造(中間組織)」について検討し、本論の結論としたい。

4.1 脱近代化運動の構成

社会的世界が物象化するという事は、問題なく繰り返されてきた人間と社会との弁証法過程が、本来通りに機能しなくなることを意味する。そこでは「社会が人間をつくりだすという状況」(Berger and Pullberg 1965: 207 = 1974: 111)が生じ、「機械的な因果性」に支配される。結果、人々は社会状況にたいし常に受身となり、人々の中に無力感が生じてくる。制度的に行き経路が規定されてしまった世界では、そこから逸脱することは、「世界や秩序への侵犯行為」(Berger and Pullberg 1965: 207 = 1974: 110)とみなされる。以上のような疎外された意識の結果、社会や人々により抑圧される存在が生まれるのである。

疎外からの解放を促し、人々と社会の本来の弁証法過程を取り戻す「脱物象化」という契機は、実際どのようなものが考えられるか。以下、バーガーが理論化した三つの契機から、具体的に脱物象化の起こりうる社会状況を想定してみたい。

まず(1)「自明視されていた世界の崩壊を必然的に伴う社会構造の全面的崩壊」がおきる場合である。これは全世界的な戦争や、革命や国家制度などの大変革による契機が想定できる。

たとえば旧ソ連や、東欧諸国の社会主義体制の崩壊などがそれに該当するであろう。イデオロギーや国家といった大規模な体制・制度の崩壊時に起こりうる状況である。バーガーは、このような混乱期や転換期が、「開かれた人間の可能性としての世界の再発見へと導く」(Berger and Pullberg 1965: 209 = 1974: 113)きっかけになると述べている。

次に(2)「文化的接触という状況やその結果として起こる<文化的衝撃>」によるものについては、植民地支配により文化が侵食された非西欧諸国や、冷戦期の第三世界における状況が考えられる。バーガーは文化的接触の結果起こりうる状況は、混乱を生む反面、物象化された旧い世界の固定性を弱め、世界を人間化すると論じている。また脱物象化の契機(2)の結果として、(1)のような大規模な体制変革が誘引されることも考えられる。

そして(3)「社会的にマージナルなところにいる個人や集団が持つ傾向」により生起される場合とは、社会的世界の「中心」や「正統」でない、「周縁」に配置された存在の意識のあり方で引き起こされる事態

のことと言い換えることができよう。

「(その存在の) マージナルなあり方は好んで選ばとられる場合もあれば、むりやり強制される場合もあり、さまざまな社会的形態をとりうる」(Berger and Pullberg 1965: 209 = 1974: 113)というように、自律他律問わず社会の「中心」から「外れた」人々による契機である。具体的には、社会の「主流」とは異なった社会形態(人種的・宗教的・道徳的・政治的)を共有する個人、集団などによるものを指す。またマージナルな存在が脱物象化の契機となる場合もあれば、脱物象化の担い手となる場合も考えられる。

「脱物象化」とは、人々の虚偽意識と疎外された社会からの解放の契機であり、戦争や革命を機にして、人々が「憑き物が落ちたように」、(自らの)虚偽意識に気づくこともあれば、「運動」の例のように、特定の層からの「抵抗・告発」によって明らかにされる場合もある。このことから分かるように、バーガーは「運動」が「脱物象化」の契機となると考え、各論で対象としたのである。

一連の「運動」を、①担い手、②対象、③イシュー(論点・争点)にわけ、整理すると以下の通りとなる。

まず「脱近代的衝動」にもとづく「運動」の主たる担い手は、社会において非中心的で周縁に位置された青年層や対抗文化であった。青年層は客観的現実において認識的な距離をおくことが可能であり、人々の虚偽意識に気がつきやすい位置づけにある。その意味で、潜在的に脱物象化的な傾向をもつものであり、社会の矛盾に敏感に反応した結果、反体制運動の主要な担い手となった。

青年層の「運動」に呼応し加わったのは、バーガーの指摘した「ニューレフト」や「過激派学生」であるが、そのほか、人々の虚偽意識に気がつかされた一般層も含まれている。これらのムーブメントはさらに、女性解放運動・自然保護運動・平和運動や人種的マイノリティの権利擁護運動などと結びつき、近代の諸制度のさまざまな問題と矛盾を露呈してゆく。

以上のように「運動」は、制度が各所に行き届き、複合的に成立している近代の社会的状況を、「物象化されたもの」として対象化した。近代の諸状況が、疎外された存在や状態、また解決すべきイシューを副次的につくりだしたために、青年層やマージナルな存在が、物象化からの解放をはかるべく対抗文化を形成し、さらには「運動」を引き起こしたのである。

「運動」の向かった対象は、「工業性」・「官僚制」で特徴づけられた、制度的複合である近代の社会的世界であり、工業性における合理性・寄木細工性・多相関性・多元性や「官僚制」における統治・体制などの諸要素に起因する問題群である¹⁰⁾。社会が物象化することにより疎外や諸制度の非人間化がすすみ、制度と意味の乖離により、経済・国家・民族・性・道徳などの領域でさまざまな問題が顕在化した。

ゆえに、制度・管理・平和・第三世界・マイノリティ・女性など、アイデンティティやヒューマニズム、モラルに関わる「ライフ・ポリティクス」が争点となる。さらに経済合理性の優先ゆえに放擲された環境問題など、近代の特性により周縁化された問題などもあわせ、「運動」のイシューとなっている。

このように「脱近代的衝動」により広がった「運動」は、トゥレーヌやハーバーマス、メルッチにより「新しい社会運動」と名づけられたムーブメントの担い手、対象、イシューとも重なっている¹¹⁾。「運動」は、「新しい社会運動」を含むその後展開された諸運動（＝脱物象化の実践）の契機になったといえる。

以上の考察から、1960年代末に先進諸国において「運動」が起きた状況とその担い手は、脱物象化契機（3）の事例に該当すると考えられる。

バーガーはしかし、脱近代化とその相補的關係にあった反近代化のムーブメントを批判し、結果として近代諸制度を対象とした脱物象化の実践の限界を示すこととなる。そして「制度と意識の両レベルにおける、多くの既存の構造の変更を追及する必要を、確信している」（Berger et al. 1973: 234 = 1977: 274-5）と述べながらも、「運動」はその担い手たりえなかったと結論づけた。その後バーガーは、脱物象化の実践研究からは下りており、「運動」以降の「新しい社会運動」や、アメリカにおけるNPO活動などは研究対象として取り扱わなかった。

また「運動」以降の展開を見ると、「運動」の求めていたものはバーガー分析のように、単に社会的世界の素朴化や価値の単一化ではなく、社会的制度や体制・常識・ルールなどの物象化を解決する「制度の人間化」であったと考えることができる。当時「運動」は不十分な展開をみせたが、後続するさまざまな社会運動を萌芽させる契機となったのは間違いなく、その意義は評価することができるだろう。

4.2 「運動」にかんする発展的考察

当時の「運動」は、全世界的にも行き詰まりをみせ、しだいに収束に向かった。その理由は、バーガーの指摘したようなディレンマのほか、一部ラディカルによる暴走や、革命（＝制度の全面置換）への拘泥するセクトに対する一般層の反発、また青年層や担い手を取りまく環境の変化や、担い手自身の状況の変化などが考えられる。

しかしながら行き詰まりの重要な要因は、脱物象化の継続の不可能性にある。「運動」は脱物象化の契機となったが、継続性が途切れ、「運動」そのものだけでは社会的世界の脱物象化をはかることはできなかった。

それでは、社会的世界や近代の諸状況により生みだされる問題や、統治領域に対する不満を解決するには、いかなる方法があるのか。それは物象化された社会的世界を人々に気づかせるだけにとどまらず、一般層や周縁化された人々に社会的世界を創造、または改変する機会を担保するというのではないか。つまり脱物象化をはかる媒体がイシューに対し、継続的に取り組める「しくみ」が必要であると考える。

実践的に脱物象化を続ける媒体は、近代的制度とその担い手の意識の結びつきを柔軟にすることと、人々の虚偽意識を気づかせる性質を持つ必要がある。その性質を考える上で、バーガーの考察がヒントとなる。

バーガーによれば、近代的世界とその担い手の結びつきである「パッケージ」には強弱があり、パッケージの結びつきがより弱い方が、物象化に陥った場合、そのあり方の修正が容易であるという。

「制度的過程と意識との結びつきは、第一次的担い手（＝工業性や官僚制そのものを支える実在）の方が二次的担い手（＝教育やメディア）より本質的」であり、さらに「官僚制よりも工業生産のほうが、制度的過程と意識のより本質的、内在的連関がある」という（Berger et al. 1973: 107-8）。つまり「工業生産制度」⇒「官僚制」⇒「教育・メディア」の順にパッケージの結びつきが弱くなる。

そのため、社会的世界の脱物象化をはかる効果的な媒体は、「教育やメディア」もしくはそれらと同様の性質をもつものであり、経済的影響力に対し一定の距離を置ける位置にあることが望ましい。また媒体が、社会的・文化的過程を支える教育やメディアなどの二次的担い手と協働するという方法も有効であろう。

その具体的形態について、バーガーが『故郷』で示

した「媒介構造(中間組織)」という概念を用いて考察したい。バーガーは、多元的現実のなかにおける人々のアイデンティティや心の拠り所として「媒介構造」の構築を想定した。構造もしくは組織は、公的な領域(社会)の影響から個人や家族など私的な領域を守るため防御するものである。しかしそれはまた、私的領域と公的領域を媒介し、さらに統治領域に影響をもつ媒体としても存在¹²⁾が可能なのではないかと考える。いずれにせよ、社会的世界の様々な領域にたいし、さまざまな層の人々が関与する手段と媒体が多数あることが望ましいだろう。

では脱物象化を継続する「媒介構造」のあり方は、どのようなものであるか。一時的な「運動」は脱物象化の契機となり重要ではあるものの、加えて「運動」などにより社会の物象化に異議を申し立てた後に、漸進的にオルタナティブを提示していく媒体が求められる。

「媒介構造」の継続性を重視すれば、制度のうえに成り立ち、組織化された集合体が効果的ではあるが、一方でその制度や組織が物象化してしまい、自己矛盾を起こす恐れがある。また制度化による「体制内化」¹³⁾や「体制編入効果」(高田 2003: 69-70)の問題も生じるだろう。制度や組織の維持には正当化が必要であるが、それは権力などにより示威されるものや、自己正当化により成立するものであってはならない。

そもそも制度や組織の物象化は、人々が批判的な視点(認識の仕方)を放棄し、それらを無条件に支持・従属することで生じるものである。そのことを避け、かつ制度や組織を保つためには、恒常的で「再帰的」な見直しが必要である。制度や組織が物象化するか否かは、客体化の維持にせよ、意識を再帰的にふりかえる時の態度が大きな転換点となるため、制度や組織が再帰的にモニタリングできる(自己制御的な)仕掛け、いわゆる「内部からの脱物象化」が必要であり、そのことが権力による自己正当化の陥穽を避ける方法となる。具体的には、制度や組織を開かれたものとし、社会的に広く情報を開示することなどで、広く承認(外部からの正当化)される必要がある。

「媒介構造」はまた、社会の「主流」とは異なった社会形態を共有する個人、集団の主張を取り上げ、生み出される 이슈を俎上にあげる役割を果たすものとなる。さらには、アイデンティティやヒューマニズム、モラルに関わる「ライフ・ポリティクス」に焦点

を当てる必要がある。

このように、脱物象化をはかる媒体には、自らを支える制度や自組織の維持を最優先するのではなく、取り組む 이슈を最重視する立場が求められる。「媒介構造」が主題化する 이슈は、巨大組織や統治機関が対応できないものや、周縁化された細やかな問題となるであろう。社会の中心性の変化や多元的状况に対応するために、 이슈ごとに細やかな対応ができる組織や、問題が生じた際に集結されるネットワーク、問題が解決したら解消、解散する時限的な制度や組織なども必要であろう。

4.3 「媒介構造(中間組織)」にかんする発展的考察

理想に燃えた青年層による異議申し立てや、ラディカルの革命の夢も、当時の「運動」とともに行き詰まりをみせた。しかし社会的世界の物象化による問題群は、その「運動」により顕在化され、依然として解決すべき課題となっている。

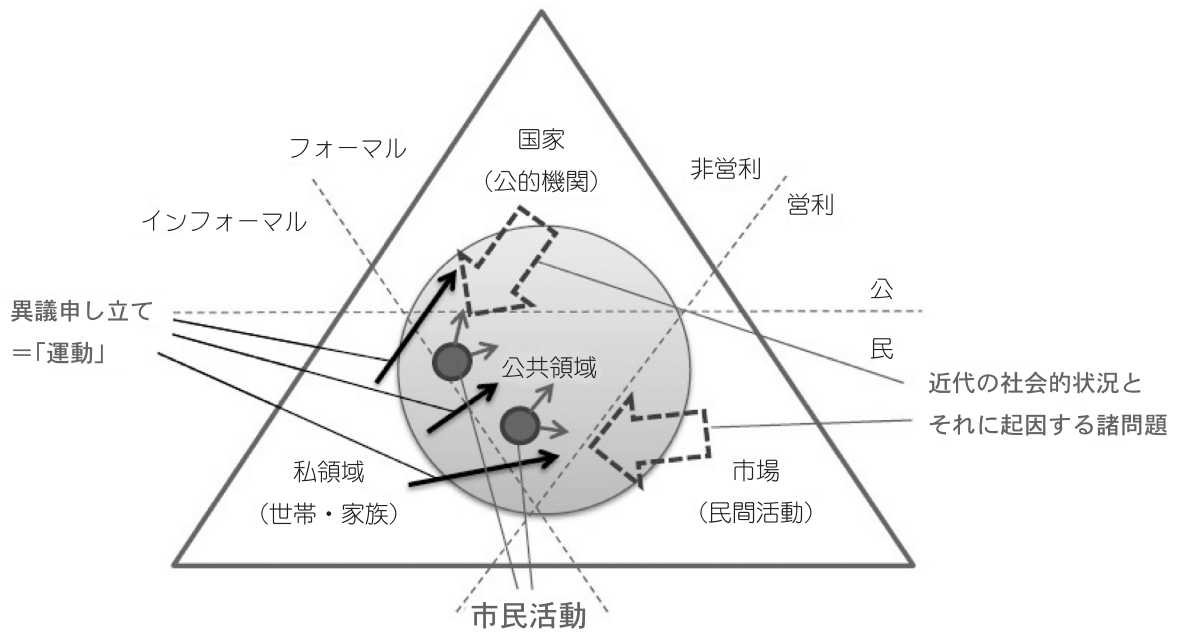
「運動」が契機となり焦点があてられた 이슈は、「新しい社会運動」に引き継がれているが、同様にわが国でも、共通した担い手、対象、 이슈をもった諸動向が萌芽した。「住民運動」や「市民運動」と呼ばれるものである。

わが国では1980年代半ば以降、「新しい社会運動」という用語が研究者で使われるようになったが、一般には広まらなかった。しかし多くの共通点をもつ住民運動や市民運動は、わが国における「新しい社会運動」と言い換えることができる。

「新しい社会運動」は、近代性の生んだ諸問題への異議申し立てという意味ではバーガーの対象とした「運動」と共通するものの、「体制」変革による諸問題の解決でなく、「制度変革」や 이슈に特化した「狭義の公的状況変革」によって、諸問題の解決を目指したものである。ただし「新しい社会運動」も時限的に存在する「運動」であり、継続して存在する「媒介構造」ではない。

1980年代以降台頭した「市民活動」は、「新しい社会運動」が主題化または顕在化した諸問題に自らを取り組み、解決を図るために登場したものである。「市民活動」を定義するならば、社会問題を顕在化させる機能と、社会問題を解決する機能を併せ持った集合行為ということになる。市民活動の 이슈は、「新しい社会運動」の対象と共通性をもつものの、より広範

図1 市民活動の位置



でかつ公益性が高く、既存の社会システムでは対応が困難なものである。

以下、市民活動の位置づけについて、V・ペストフの「トライアングルモデル」を用いて説明したい。ペストフの「トライアングルモデル」は、もともと福祉分野の非営利活動を説明する図式として開発されたものであるが、「住民運動、市民運動」や「市民活動」の社会的な位置づけを説明するのに適しているために用いたい。

図1（市民活動の位置）は、市民活動ならびに住民運動、市民運動の社会的な位置づけ＝「領域」を示したものである。三角形の中央に位置するこの空間は、これまでわが国においては各セクターに共有され（common）、開かれていた（open）領域であった。国家、企業の両セクターと個人・コミュニティなどの私的領域との相互作用がもたらされる領域である。ここでは「公共領域」と呼ぶ。

住民運動や市民運動（図1では「運動」と表示）は、バーガーの対象とした「運動」と同様、私的領域からトライアングルの中心部の空間（公共領域）を通して「国家」、「市場」へと向かう実線の矢印で示している。「運動」の対象は「国家」、「市場」をはじめ、公共における物象化された意識など、 이슈によっては「公共領域（公共空間）」そのものとなる場合もある

（図1の真ん中の矢印）。たとえば、女性やマイノリティへの差別意識、常識など社会一般において「自明」とされているものに対する異議申し立て（社会への問いかけ）がこれに該当するだろう。

一方、図1の公共領域に示された小さい丸印が市民活動の位置である。対象、イシューに関しては、住民運動、市民運動と市民活動の間には差はないが、領域における位置とその役割に両者の違いがある。「運動」はアド・ホックなものであり、矢印のみで示している一方、市民活動は「媒介構造」として組織化し、継続した活動をおこなうため、公共領域に組織体として存在する。

このように、公共領域で点在し、団体ごとばらばらに、または分野ごと縦割りで活動していた市民活動団体は、その活動の対象、イシューなどの目的や、団体の抱える構造的な課題といった共通項を発見し、互いに連携することになる。ここに市民活動という包括的概念が確立され、一般化した。

市民活動が一般化し、社会に不可欠なものであると認識されると、その制度的基盤の充実を図るために、NPO法制度が創設されることとなった。このNPO制度の創設を通して、わが国における「サードセクター＝市民セクター」が可視化され、生成されることとなった。この「サードセクター＝市民セクター」こそが、脱物象化をはかる「媒介構造（中間組織）」

として機能するのではないかと考える。

わが国において「サードセクター＝市民セクター」を構成する、市民活動団体やNPO/NGO、またソーシャルビジネスやコミュニティビジネスなどの社会的企業は、組織を開かれたものとし、広く情報を開示することなどで社会から広く承認されるだろう。そして、社会の「主流」とは異なった社会形態を共有する個人、集団の主張を取り上げ、生み出されるイシューを組上にあげる役割を果たすとともに、アイデンティティやヒューマニズム、モラルに関わる「ライフ・ポリティクス」に焦点を当ててゆくものとなろう。

「サードセクター＝市民セクター」は、巨大組織や統治機関（ファーストセクターやセカンドセクター）が対応できないものや、周縁化された細やかな問題をイシューとし、自らを支える制度や自組織の維持を最優先するのではなく、取り組むイシューを最重視する立場が求められる。そしてイシューに実直に取り組み、「再帰的」に自らの在り方を見直すことにより、脱物象化をはかる媒体として存立し続けることができる。と考える。

2017年6月28日、ピーター・ラドウィグ・バーガー（Peter Ludwig Berger）が逝去した。ささやかながら本論文をささげて、氏の冥福を祈りたい。

徳的に正当化可能な生活形式の創造」、「実存的問題の背景の下にいかにかに生きるべきか」に関わる倫理を発展させるもの」をライフ・ポリティクスとした（Giddens 1991=2005）。

- 7) 社会的世界との「交渉過程」であり、「アイデンティティ危機」という永続する制度化の時代と自己を探す期間（Berger and Neuhaus 1970:38）。
- 8) 「カタストロフィーが起こらない限り、テクノロジカルな、あるいは官僚制の機構を全体として脱ぎ捨てることが不可能である」（Berger et al. 1973:216=1977:253）とした。
- 9) アイデンティティの連続性、行為を取り囲む社会的、物質的環境の安定性にたいし抱く確信をさす。（Giddens 1990=1993）
- 10) とくに関係性と諸制度の形式化への不満は、工業性より強い要素となる（Berger et al. 1973:182-3）。
- 11) 担い手は、メルッチの「新しい社会運動」のものと共通である。また対象やイシューは、ギデンズの「後期近代」の問題点、ハーバーマスの「生活世界の植民地化」として述べられたものと共通性がある。
- 12) 今田高俊は、家族・町会・地域コミュニティを「伝統的中間集団」とし、「市場や政府が抱える利益追求原理や官僚制の逆機能に陥ることなく公共性を開く」には、中間集団の再生が必要とした。そしてボランティア組織、NPO・NGOなどの「新中間集団」の可能性に注目している（今田1998）。
- 13) バーガーにより「媒介構造/中間組織が別の形の政府機関となってしまう」（Berger and Neuhaus 1977:150-1）危機が示され、「媒介構造/中間組織が統治機構に変形しつつある現実を、社会政策の中心に据え、再考する必要」（Berger and Neuhaus 1977:151）が述べられている。

文献

- Arendt, Hannah. 1958, *Vita activa oder vom tätigen Leben*, München: Piper Verlag GmbH., (=2015, 森一郎訳『活動的生』みすず書房.)
- Berger, Peter L. 1967, *The Sacred Canopy: Elements of a Sociological Theory of Religion*. New York: Random House. (=1979, 園田稔訳『聖なる天蓋——神聖世界の社会学』新曜社.)
- 1974, *Pyramids of Sacrifice: Political Ethics and Social Change*, New York: Doubleday. (=1979, 加茂雄三・山田睦男・乗浩子訳『犠牲のピラミッド——第三世界が問いかけるもの』紀伊國屋書店.)
- Berger, Peter L. and Pullberg Stanley 1965, “Reification and the Sociological Critique of Consciousness,” *History and Theory*, 4: 196-211. (=1974, 山口節郎訳「物象化と意識の社会的批判」『現象学的研究』2: 94-117.)
- Berger, Peter L. and Richard John Neuhaus 1970, *Movement and Revolution*, New York: Doubleday.
- Berger, Peter L. and Richard John Neuhaus, [1977] 1996, *To Empower People: From State to Civil Society*, Washington, D.C.: The AEI Pres.
- Berger, Peter L. and Thomas Luckmann 1966, *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, New York: Random House. (=2003, 山口節郎訳『現実の社会的構成——知識社会学論考』新曜社.)

- 1) 「工業生産」は、合理性、匿名化を伴う寄木細工性、諸現象への認知スタイルに関わる多相関性、多元性、進歩・革新性で特徴づけられる。また人々の生活史を永続的な「問題解決の事業」へと変化させる。「官僚制」は、社会のシステム化、多元性多様性の秩序化、私的・公的領域の分離、人権の操作可能性といった作用を、社会的世界にもたらすという（Berger et al. 1973:111-5）。
- 2) イリイチの概念の転用。制度的過程と意識群の結合を意味する（Berger et al. 1973:17=1977:16）。
- 3) 工業生産領域、官僚制そのものを支える実在を第一次的担い手、社会・文化的過程を支える教育やマスメディアなどを第二次的担い手と区別した（Berger et al. 1973:182-3=1977:103）。
- 4) いわゆる学生運動とニューレフト主導の反体制運動である“The Movement”が、アメリカ各地や先進諸国に伝播した1969年のことである。
- 5) 「急進的運動」は、故意ではないにせよ、この時期に偶然に顕在化した問題群を、プロパガンダとして利用していると批判した（Berger and Neuhaus 1970:42）。
- 6) ギデンズは、後期近代より顕著化した「選択の自由と生成的権力から発する政治的決定」、「自己実現を促進する、道

- Berger, Peter L., Brigitte Berger and Hansfried Kellner 1973, *The Homeless Mind: Modernization and Consciousness*, New York: Random House. (=1977, 高山真知子・馬場伸也・馬場恭子訳『故郷喪失者たち——近代化と日常意識』新曜社.)
- Berger, Peter L. and Hansfried Kellner 1981, *Sociological Reinterpreted: An Essay on Method and Vocation*, New York: Doubleday. (=1987, 森下伸也訳『社会学再考——方法としての解釈』新曜社.)
- Giddens, Anthony. 1990, *The Consequences of Modernity*, Cambridge: Polity Press. (=1993, 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か?——モダニティの帰結』而立書房.)
- Giddens, Anthony. 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Cambridge: Polity Press. (=2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)
- 今田高俊 1998 「グローバル公共哲学の射程」
(<http://homepage2.nifty.com/public-philosophy/imada3.htm>, 2005.12.1.)
- 松元一明 2007 「脱物象化事例としてのNPO・市民活動論」『成蹊人文研究』15: 149-168.
- 2015 「市民活動による市民セクターの生成 — P・L・バーガーの理論とペストフの図式を利用して(1)」『成蹊大学文学部紀要』50: 177-200.
- 2016 「市民活動による市民セクターの生成 — P・L・バーガーの理論とペストフの図式を利用して(2)」『成蹊大学文学部紀要』51: 175-192.
- Pestoff, V., 1998; *Beyond the Market and State. Social enterprises and civil democracy in a welfare society*; Aldershot, Brookfield, Sidney & Singapore: Ashgate. (=2000, 藤田暁男・川口清史・石塚秀雄・北島健一・的場信樹訳, 『福祉社会と市民民主主義——協同組合と社会的企業の役割』日本経済新聞社.)
- 高田昭彦 1998 「(巻頭エッセイ) 市民による市民のための制度づくり——NPO法を実現させた市民活動」『環境社会学研究』4: 1.
- 2003 「市民運動の新しい展開——市民運動からNPO・市民活動へ」『都市問題』東京市政調査会, 94(8): 69-84.

